

養護教諭と連携した中学生の性教育プログラム開発

高橋佐和子^{*,1)}、伊藤純子¹⁾、渥美早百合²⁾、石川志奈³⁾、千徳茜⁴⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾細江中学校、³⁾三方原中学校、⁴⁾八幡中学校

I 背景・目的

学校における性教育の必要性は認識されているものの、テーマの扱いにくさや思春期の生徒との関わりの難しさから、一般教員には敬遠されがちである。養護教諭は、心身の成長・発達に関する専門的知識を持つ上に、学校で発生するいじめや性に関する問題行動等の情報が集まりやすい立場にあるため、生徒の性に関する課題を把握しやすい。そのため、学校で性教育の企画および推進の中心的役目を担っているのは、養護教諭であることが多い。しかし、養護教諭は、学校に1人しか配置されていないことがほとんどであるため、性教育プログラムの開発や評価に専念できる時間は限られており、話し合う相手もなく、把握した課題や実態をプログラムの内容や方法に生かしきれていないのが現状である。

そこで、これまで研究者らは、地域の複数の中学校の養護教諭と連携・協力しながら性教育プログラムを開発し、その実施に取り組んできた。

ここでは、養護教諭の把握した情報を生かして開発したプログラムの効果を評価することを目的に行った中学生へのアンケート調査の結果を報告する。

II 方法

1) プログラムの検討

A中学校で実施予定の60分間の「性に関する講演会」のプログラムを開発した。

研究組織のうち、現職の養護教諭3名は中学生の実態把握を行い、大学教員2名は教育プログラムの作成と実施を担当することとした。

プログラム開発のために4回(2ヶ月に1回程度)、研究メンバーによる会議を行った。会議では、研究者が試作したプログラム案を提示し、これをもとに中学生の性に関する課題や関連があると考えられる生活実態、それぞれの学校での性教育や関連する指導の実施状況、実情を踏まえた効果的な教育方法について、話し合いを行った。話し合われた内容からプログラム案の修正を繰り返した。また、現職の養護教諭の話から、中学生のコミュニケーション能力の低さや、性的な関心の個人差の大きさに関する具体的な情報を収集することができた。これらの情報をもとに、プログラムには、コミュニケーション力や自己効力感を高めるアサーションや代理的体験を取り入れた。また、性に関する講演の際、中学生は周りの目が気になることや、恥ずかしさから、下を向く姿がよく見られるという実態も挙げられていた。そこで、中学生の好む視覚的な効果を重視したパワーポイントを教材に使用し、テレビの相談コーナーという場面設定で演劇調に講演を進めるなど、恥ずかしさを軽減し、興味を引き付けるための工夫をした。

2) 講演会の実施

開発したプログラムは2015年11月にA中学校の2年生204名を対象に、体育館で実施した。講師は、研究メンバーのうち大学教員2名が担当した。一人がテレビ番組の司会者、もう一人が相談に答える思春期の性に関する専門家という設定で講演を行った。

3) プログラムの評価

A中学校では、講演前後に中学生の性に関する意識についてのアンケート調査を行った。

事前調査は講演の1週間前から前日までの間にクラスごとに実施し、事後調査は講演後、講演会場から教室に戻った直後にクラスごとに実施した。

アンケートの内容は、本プログラムで目的とした早期妊娠予防に関連する意識の変化を評価するために、計画的行動理論¹⁾及びP/Wモデル²⁾をもとに自作した12項目を用いた。回答は、「とてもそう思う：1」から「全く思わない：6」の6段階で得た。

調査結果の分析には、SPSS22.0を使用し、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。

さらに、講演終了後の中学生の感想を得るため、事後のみ、講演が「役に立つと思うか」、「おもしろかったか」を各4段階で尋ね、感想の自由記述も項目に加えた。

表1 事前事後アンケートの質問項目

- 1 性の悩みを、正しいアドバイスをくれる人(親・医師・先生など)に相談できる。
- 2 人より体の発育が早い、または遅いのは恥ずかしいことだ。
- 3 彼氏彼女がいる(異性と交際する)中学生はカッコいい。
- 4 10代のうちに自分の子どもができてもいい。
- 5 あなたは男女の肉体的、性的な関わりを経験したくないと思っていると仮定して、
交際相手にそれを求められたら断ることができる。
- 6 友達より早く男女の肉体的、性的な関わりを経験してみたい。
- 7 中学生は男女の肉体的、性的な関わりを経験するべきではない。
- 8 中学生であっても、男女の肉体的、性的な関わりをするかどうかは個人の自由である。
- 9 あなたの親は「中学生は男女の肉体的、性的な関わりをしていい」と思っている。
- 10 あなたの友達は「中学生は男女の肉体的、性的な関わりをしていい」と思っている。
- 11 自分は2年以内に男女の肉体的、性的な関わりをするかもしれない。
- 12 ヤンママ・パパ(10代で自分の子どもを持つ人)はカッコいいと思う。

4) 倫理的配慮

実施前、保護者には文書で、中学生には口頭で研究の目的と回答の自由について説明を行った。アンケート用紙は無記名とし、封筒に入れ、封をした状態で回収した。なお、本調査は聖隷クリストファー大学の倫理委員会の承認を得た方法を遵守して実施した。

III 結果

A 中学校の2年生 204名中、198名から回答を得た(男子98名、女子94名、未記入4名：回答率97.1%)。

1) 公演前の意識(表2)

早期妊娠予防に関連する意識に関する12項目事前調査結果は以下の通りであった。

表2 講演前の意識

項目(表1参照)	1:とても そう思う	2:そう思う	3:まあ思う	4:あまり 思わない	5:そう 思わない	6:全く 思わない	無回答
1 相談できる	8(4.0)	9(4.5)	38(19.2)	45(22.7)	43(21.7)	52(26.3)	3(1.5)
2 発育恥ずかしい	1(0.5)	9(4.5)	40(20.2)	65(32.8)	36(18.2)	44(22.2)	3(1.5)
3 交際カッコいい	11(5.6)	10(5.1)	43(21.7)	55(27.8)	32(16.2)	44(22.2)	3(1.5)
4 10代で子ども肯定	1(0.5)	2(1.0)	2(1.0)	37(18.7)	38(19.2)	115(58.1)	3(1.5)
5 断ることができる	69(34.8)	42(21.2)	41(20.7)	21(10.6)	10(5.1)	12(6.1)	3(1.5)
6 早く経験したい	3(1.5)	2(1.0)	10(5.1)	40(20.2)	38(19.2)	101(51.0)	4(2.0)
7 中学生はすべきでない	67(33.8)	46(23.2)	33(16.7)	23(11.6)	10(5.1)	14(7.1)	5(2.5)
8 個人の自由	21(10.6)	27(13.6)	66(33.3)	31(15.7)	18(9.1)	31(15.7)	4(2.0)
9 親は肯定	3(1.5)	1(0.5)	7(3.5)	29(14.6)	46(23.2)	108(54.5)	4(2.0)
10 友達は肯定	9(4.5)	7(3.5)	26(13.1)	38(19.2)	44(22.2)	70(35.4)	4(2.0)
11 2年以内にするかもしれない	2(1.0)	1(0.5)	7(3.5)	19(9.6)	29(14.6)	136(68.7)	4(2.0)
12 ヤンママ・パパカッコいい	3(1.5)	4(2.0)	10(5.1)	29(14.6)	43(21.7)	106(53.5)	3(1.5)

2) 講演前後の意識の変化(表 3)

早期妊娠予防に関連する意識に関する 12 項目について、講演前後の回答の変化について分析を行った。

12 項目のうち、「中学生は男女の肉体的、性的な関わりを経験するべきではない」以外の 11 項目で有意な差があった。

3) 実施後の感想

講演後、講演が「役に立つと思うか」、「おもしろかったか」について、それぞれ 4 段階で回答を求めた。

「役に立つと思うか」の質問では、「役に立つと思う」が 125 名 (63.1%)、「まあ役に立つと思う」が 45 名 (22.7%)、「あまり役に立たないと思う」が 4 名 (2.0%)、「役に立たないと思う」が 3 名 (1.5%) であった(無回答:21 名 10.1%)。

「おもしろかったか」の質問では、「おもしろかった」が 103 名 (52.0%)、「まあおもしろかった」63 名 (31.8%)、「あまりおもしろくなかった」5 名 (2.5%)、「おもしろくなかった」5 名 (2.5%) であった(無回答:22 名 11.1%)。

自由記述に記載したものは 65 名 (32.8%) であり、このうち 64 名が「おもしろかった」、「わかりやすかった」などの肯定的意見であった。

表 3 講演前後の意識の変化

項目(表 1 参照)		中央値	平均値	SD	p
1 相談できる	前	4.00	4.34	1.39	0.00**
	後	3.00	3.17	1.41	
2 発育恥ずかしい	前	4.00	4.32	1.19	0.00**
	後	5.00	5.11	1.05	
3 交際かっこいい	前	4.00	4.12	1.41	0.00**
	後	5.00	4.60	1.32	
4 10代で子ども肯定	前	6.00	5.33	0.94	0.00**
	後	6.00	5.77	0.59	
5 断ることができる	前	2.00	2.47	1.49	0.00**
	後	2.00	2.24	1.57	
6 早く経験したい	前	6.00	5.12	1.13	0.00**
	後	6.00	5.52	0.88	
7 中学生はすべきでない	前	2.00	2.51	1.54	0.55
	後	2.00	2.44	1.84	
8 個人の自由	前	3.00	3.47	1.53	0.00**
	後	5.00	4.40	1.58	
9 親は肯定	前	6.00	5.26	1.04	0.00**
	後	6.00	5.53	0.83	
10 友達は肯定	前	5.00	4.60	1.42	0.00**
	後	5.00	5.01	1.21	
11 2年以内にするかもしれない	前	6.00	5.47	0.97	0.00**
	後	6.00	5.69	0.68	
12 ヤンママ・パパかっこいい	前	6.00	5.17	1.14	0.00**
	後	6.00	5.57	0.85	

※ Wilcoxon

**p<0.01 *p<0.05

IV 考察

本講演では、養護教諭が把握している実態をもとに話し合い、その結果を反映させて開発したプログラムを実施した。実施前の調査結果から、中学生は、性の悩みを相談しにくい、性交渉を断ることができる自信の低さがあることが示唆された。養護教諭の把握した課題に近い結果であった。いずれも、若年妊娠に直結する課題であり、これらを考慮したプログラム開発が必要であろう。評価の指標とした若年妊娠予防への意識に関する項目の多くで有意な変化がみられ、プログラムの内容に一定の効果があったと考える。しかし、

変化のなかった項目もあり、内容とともに評価項目についての検討が今後必要であろう。

「中学生は性交渉をすべきでない」に有意な変化が見られなかった原因には、講演では性交渉は雰囲気の流れに流され、意思に反して行うべきものではないことや若年妊娠が抱える問題点については話したものの、中学生の性交渉を否定したわけではなかったこと、1回の指導では変化しにくい意識であった可能性が考えられる。また、実施後、おもしろかった、役に立つと思うという感想が多かったことから、講演に興味を持てたことがうかがわれる。講演の形式における工夫もこの結果に良い影響を及ぼしたものと思われる。今回は講演直後の調査結果を事前調査と比較したが、今後は講演の効果の持続についても、検証できるような研究設計が必要であろう。

幾つか限界はあるものの、養護教諭の把握している情報を生かした教育の内容及び方法を生かし、教育プログラムを開発することには大きな意味があると考えられる。今後は、プログラム開発に必要な情報を明らかにし、学校に一人しかいない養護教諭であっても確かな実態把握・情報提供ができ、教育に活用できるシステム作りが必要であろう。

V まとめ

養護教諭と連携しながら地域における講演活動を実施し、地域の子どもたちのみでなく、養護教諭の力量向上にも寄与できるよう、研究を継続していきたいと考える。

本研究の過程の一部は、The 6th International Conference on Community Health Nursing（韓国・ソウル：2015.8）で発表した。結果の総括については、第75回公衆衛生学会（大阪：2016.10）において発表する予定である。

最後に、本研究にご協力くださいました中学生の皆様に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 1) 松本千明. 医療・保健スタッフのための健康行動理論の基礎. 東京：医歯薬出版株式会社, 2003. 37-46
- 2) Gibbons FX, Gerrard M, Blanton H et al. Reasoned action and social reaction: willingness and intention as independent predictors of health risk, Journal Of Personality And Social Psychology 1998; 74 (5):1164-80